

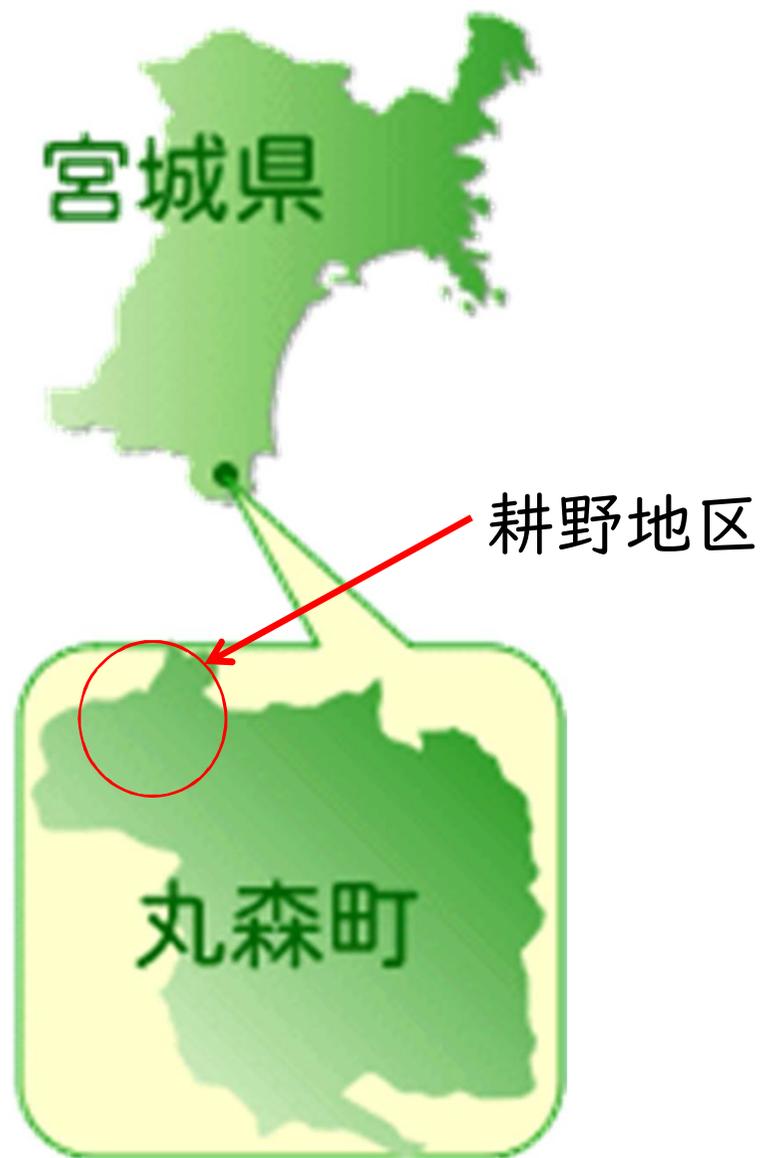
宮城県丸森町での 草の根技術協力事業の取り組み紹介



耕野振興会
(宮城県丸森町)
プロジェクトマネージャー
石塚武夫



丸森町と耕野地区



宮城県の一歩南

“丸森町” (全8地区)

人口:12,322人

(推計人口、2021年1月1日)

丸森町の西側

“耕野地区”

戸数:239戸

人口:601人

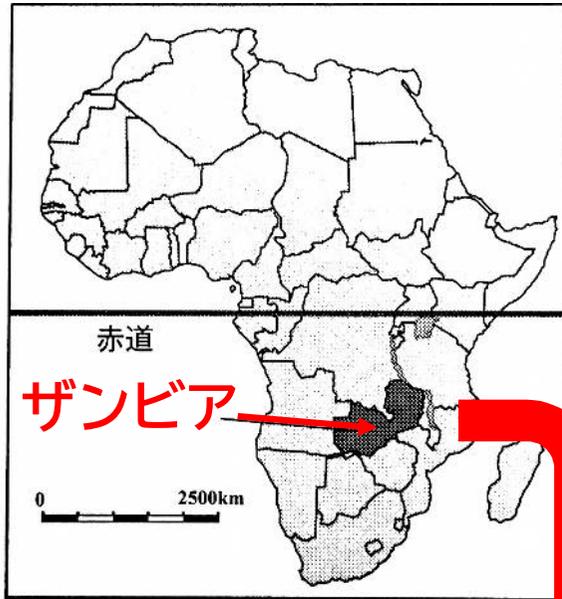
男性321人 / 女280人

(2020年10月末時点)

草の根技術協力プロジェクト(地域活性化特別枠)

- プロジェクト名称：丸森町の在来技術を活用した小規模農家の食糧の利用安定強化プロジェクト
- プロジェクト目標：農村において小規模農家世帯が十分かつバランスのとれた食事をし、生産物を販売している。
- 対象地域：ザンビア国ルサカ州チランガ郡・カフエ郡
- 事業対象者：小規模農家
- 事業期間：2016年3月28日～2019年3月27日(3年間)

プロジェクトの対象地域



ザンビア

ザンビアの位置



ルサカ州

ルサカ州の位置

チランガ郡

首都ルサカ



カフエ郡

両郡を合わせた面積は9,396km²で、
これは山形県とほぼ同じ大きさ
(9,323km²:日本で9番目に大きい県)

プロジェクトの実施体制

提案団体：**丸森町**(地方自治体)

実施団体：**耕野振興会**(住民自治組織：耕野まちづくりセンターの管理を町から委託されている任意団体)

事業コンセプト：丸森町の地域住民が持つ在来技術(=伝統的技術・知識・経験など)を、ザンビア国の農村部で生活する農家に紹介し、それらを活用してもらうことで貧困解消に貢献していく。

プロジェクトの成果について

成果1. 農家が新規農作物の生産を開始している。



ジャガイモ栽培(種芋カット方式の紹介)



大豆と落花生栽培の普及(トウモロコシ+α)

成果2. 農家が農産物加工・保存技術を習得している。



伝統的なやり方(天日干し)



日陰用ネットを使った食品乾燥

プロジェクトの成果について②

成果3. 農家がマーケティングに関する知識を習得している。

出荷作業とスーパーマーケットの視察



大豆の販売支援活動



成果4. 農家が栄養に関する知識と調理方法を習得している。

本邦研修での栄養講座



調理実習&食事会(okonomi-yaki)





Q.なぜ丸森町で、
草の根技術協力事業に
取り組んでいるのか？

丸森町耕野地区が抱えている地域課題

地域課題：**地域コミュニティの衰退**

- ① 少子高齢化が進み、転出者の増加による人口減少
- ② 空家の増加
- ③ 耕作放棄地の増加
- ④ 地域行事への協力者の減少
- ⑤ 原発事故による風評被害

**地域社会が徐々に活力を失ってしまい
以前よりも閉塞感が漂うようになってしまった。
このままでは自分たちの地域が・・・。**

ザンビアと繋がった経緯

キーパーソン:Nさん 丸森町耕野地区への移住者

RESCAP (JICAの技術協力プロジェクト) 専門家としてザンビアへ渡航

※RESCAP: 農村振興能力向上プロジェクト(2009~2014)

・RESCAPの日本での研修の際に、ザンビア人研修生が丸森町を訪問し研修や現場視察、さらにホームステイを行った。

- ザンビアから日本へ(のべ21人)
合計**3**回 研修2回(8人×2回)
視察1回(5人)
- 日本からザンビアへ(のべ9人)
合計**5**回 技術協力3回(3人)
視察2回(6人)



ザンビア人との交流を通じて 耕野地区で何が起きたか

ホームステイ受け入れ先の感想

- ・向こうは英語しゃべってて、こっちはもちろん日本語しゃべってんだけど、なんだかわかる気がするんだよな。
- ・黒人だとか、アフリカだとかっていったって、違うところはもちろんある。けど本当のところは大して変わんねんだね。

アフリカじゃなくてザンビア
黒人じゃなくてジョセフィン
遠いけれど身近な国

RESCAPの終了後(2014年12月頃)

・中山間地域という農業を行うには条件の悪い地域で暮らしているが、その中で産まれた創意工夫を使って私たちに協力出来る事があるのではないか。

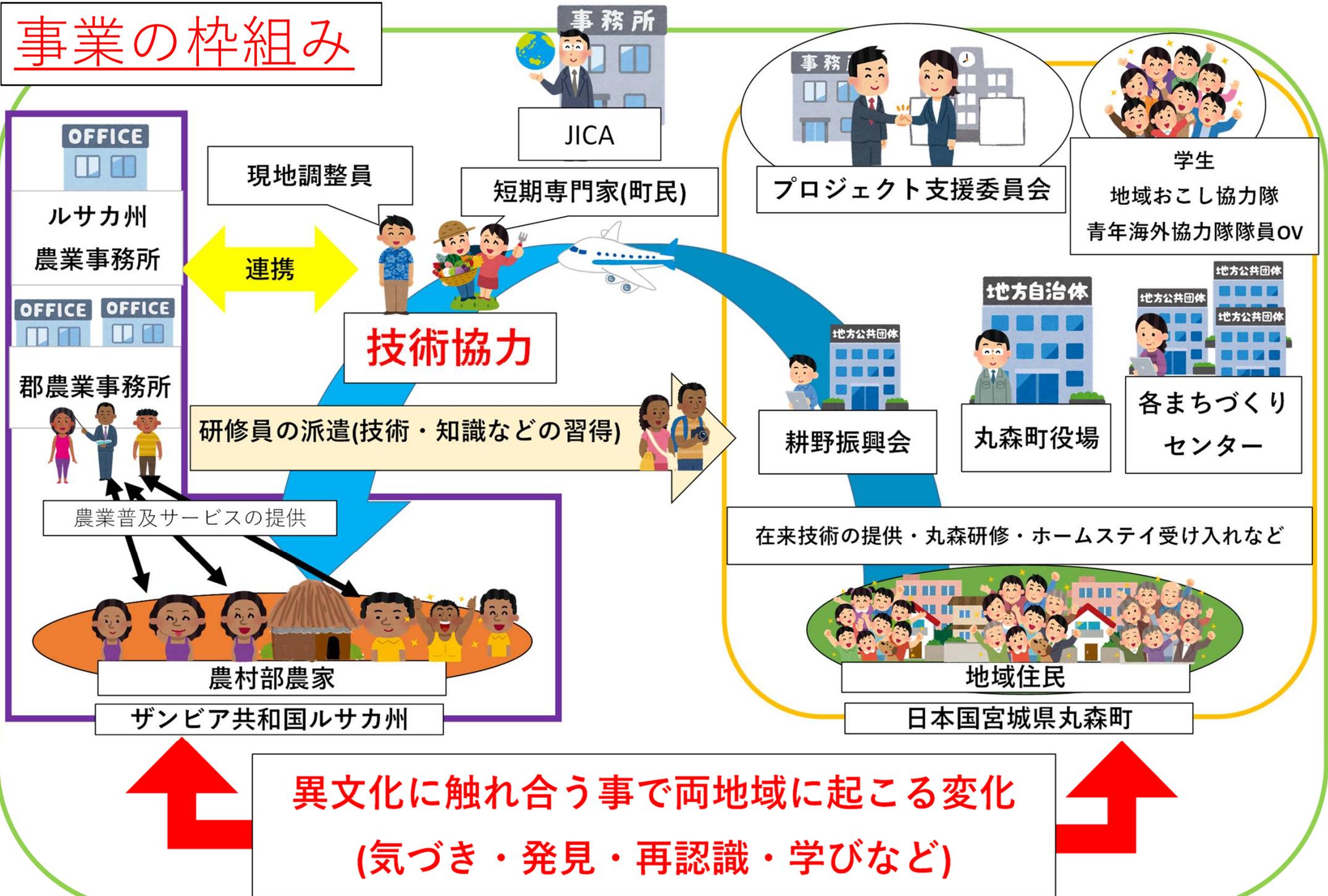
・地域を何とかしよう、という思いは万国共通。ザンビアの農家が熱心に学ぶ姿を見て、私たちも原点に立ち返り、地域を見直し、また元気をもらえらる。

今度は自分達でも動いてみよう!

協力者を増やす

- ・自分たちは国際協力の素人なので、言語や現地での活動やプロジェクトの運営(書類作業など)に不慣れ。
- ・ザンビアとの交流を通じて知り合った方々やJICA東北に相談したりして、自分達に出来る国際協力を模索した。
- ・プロジェクトの実施に当たり、大学の先生や開発コンサルタントや青年海外協力隊経験者の力を借りて事業を進めていった。

事業の枠組み



主な人の動き

	2016年度	2017年度	2018年度	合計
本邦研修 	4名(9月)	2名(7月) 5名(9月)	4名(9月) 3名(12月)	18名受け入れ
短期専門家派遣 	2名(12月)	5名(1月)	2名(12月) 2名(1月)	11名派遣
現地駐在員 JICA海外協力隊OV	通年(11ヶ月)	通年(11ヶ月)	通年(11ヶ月)	1名
現地の 参加農家	のべ1015名 男性:387名 女性:628名	のべ2027名 男性:756名 女性:1271名	のべ2067名 男性:644名 女性:1423名	のべ5109名 男性:1787名 女性:3322名

農業・健康・収入に関する悩み



プロジェクト という場を通じて

新しい技術や知識が身に付く
品種が増える、収入が増える
健康な生活が送れる



自分たちの技術や知識は古くさい
地域に活気が無い
域外との交流に乏しい



自分達の技術や知識が役に立つ
地域を見つめ直す切っ掛け
海外との交流



技術協力 地域づくり

養蜂農家の技術協力



技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



①ケニア式巣箱(現地で流通している)

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



②Beekeeper vs 養蜂農家
(※危険なので真似しないで下さい)

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



③日本の重箱式巣箱を提案し一緒に作成
(+自分たちで作れるように)

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



④重箱式巣箱とスタンド完成

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



⑤手製の面布(身近な素材で手作り)

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



⑥蜂の生態と巣箱の使い方を教える(安全な養蜂)

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



⑦農家に巣箱を渡して実践してもらう

技術協力の現場紹介(養蜂を事例にして)



⑧初めて収穫出来たよ！

現地での技術協力で大事だと思う事

- 相手のことを良く知ろうとする
- 何でも良いから(例:身振り手振り)コミュニケーションを取る
- 身の回りにある資源を活用する
- 失敗は成功のもと



← 丸森とザンビア →

稲作

Rice production



大豆

Soya Beans



落花生

Ground Nut



野菜栽培

Vegetable Production



有機農法

Organic Farming



育苗トレイ Pot-tray for nursery



堆肥作り Compost Making



加工保存(包装) Improved Packaging



食品乾燥保存 Dry vegetable



栄養指導 Nourishment



VA (Vitamin A)			Fried ↑
VB₁ (Thiamine)			Boiled ↓
VB₂ (Riboflavin)			Boiled ↓

調理実習 Cooking demo



丸森町へのプロジェクトの影響



丸森町役場への影響

- ・協力が消極的だった丸森町役場だが、実際に研修生が来て丸森町役場の中を歩いた時に雰囲気が変わった。
- ・町長や担当官が、前向きに応援してくれていた
(表敬訪問/修了式の実施/報告会と懇親会への出席/独立記念日記念式典への参加/エドガー・ルング大統領の訪日時に官邸での晚餐会に招待など)
- ・プロジェクト終了後に、オリンピックのホストタウンへ立候補した。2020年11月には第16回JICA理事長賞を宮城県丸森町として受賞した。

地域住民への影響

「一度会うことで、その国の人々のイメージや偏見がなくなる効果は大きい。一度会えばその国全体に対して全然違う印象を持つようになる。遠いザンビアという国から人が丸森町に来るのは非常に貴重な機会」

「子どもの頃に海外の人と触れることが、その子の世界を広げ、一生に影響していくと思う」

「また子供が家で話せば親にも広がる。こういう小さな積み重ねが世界平和に繋がると思う」

引用：終了時評価調査町民インタビューより



最後に：ザンビアへの想い





ご清聴ありがとうございました